会　報

1983

No. 15

１９８３年3月１２日　八ケ岳・大同心

KAC

神戸山岳会

目　　次

１９８３年　冬山合宿報告 …… 1

序　　文 …… 山本泰彦 …… 1

合宿の概要 …… 1

行動記録 …… 広池義則 …… 2

個人山行

妙高山・火打山 …… 大西章代 …… 4

石鎚山 …… 堀田　久 …… 5

笠ケ岳 …… 山本泰彦 …… 7

扇ノ山 …… 幸内義孝 …… 8

富士山 …… 小林利樹 …… 9

三室山～後山縦走 …… 山本泰彦 …… １０

信州・根子岳 …… 山本泰彦 …… １３

大同心・雲稜ルート …… 山本泰彦 …… １４

氷ノ山～扇ノ山縦走 …… 内藤保一 …… １６

氷ノ山・大段平 …… 国沢昭美 …… １９

千ケ峰 …… 国沢昭美 …… ２０

銀杏峰・部子山 …… 山本泰彦 …… ２２

例会報告 …… ２４

随想・兵庫百山 …… 山本泰彦 …… ２５

行　　事 …… ２８

編集後記 …… ２８

1983年 冬山合宿報告

序　　文

山本泰彦

今年も、また新人対象ということで　五竜岳～唐松岳の一般路を　行くことになった。昨年の甲斐駒ケ岳～仙丈岳といい、「合宿とは何か？」を考えさせられるようなルートと　ならざるをえなかった。しかも、最終的に　参加者は　現役1名、新人2名という山行のできる　ぎりぎりの人員となった。

しかし、後立山方面は　天候も悪く、吹雪、沈澱、烈風そして晴天と　冬山の色々な面を一度に見たことは　新人諸君にとって　良い経験になったと思う。

沈澱の時、延べ10時間もの除雪を　自発的にやってくれた広池君。料理は本質的に嫌いといいながら、おいしい食事を作った大西さん。それぞれ、ゲレンデではみられない長所をみせてくれた。合宿をひとつのステップとして、山を登らない人達の評論家的言論に惑わされることなく、神戸山岳会の目的は、「山の研究とその実践（登山すること。）」であることを認識して、一人前のアルピニストを目指して　己を鍛え、より一層、成長してほしいと思う。

合宿の概要

登山地　：　北アルプス　五竜岳、唐松岳

目　的　：　新人会員の積雪期登山技術の習得

期　間　：　1982年12月30日～1983年1月2日

日　程　：　12月29日　大阪発（くろよん号）

12月30日　神城 — 地蔵ノ頭 — 小遠見山 — 大遠見山 — 西遠見山

12月31日　沈澱

1月　1日　B.P. — 白岳 — 五竜岳 — 白岳 — 大黒岳・牛首岳鞍部

1月　2日　B.P. — 牛首岳 — 唐松岳 — 八方山 — 白馬 — 神戸

パーティ　：　山本（L）、広池（装備、記録）、大西（食料、気象）

行　動　記　録

広　池　義　則

１２月３０日（雪）　テレキャビン駅終点（８：２５）── 地蔵の頭（８：５０）── 小遠見山（１０：２０～１０：３０）── 中遠見山（１０：５５～１１：２０）── 大遠見山（１２：００）──── 西遠見山（１３：１０）

夜行にて白馬駅に着く。列車から出てみると、天気の方はもうひとつ良くない。まだ、眠たそうにしながらも駅にて朝食をとり、荷物を整える。それから、タクシーにて五竜とおみスキー場へ……　テレキャビンで一気に終点まで上がると、小雪が降っている。寒さはあまり感じないが、一応ヤッケを着こみ、はやばや出発する。混雑したテレキャビン終点から地蔵平までは、リフトがあるのだが、すでに大勢の先行パーティーらが列をなして登っているので、そのトレースを追うように、僕をトップに、次に大西さん、山本さんがラストの順で歩く。３０分ほど登ると地蔵の頭に着く。ここで小休止をとり、記念写真を２～３枚パチリ。正月の山は登山者が多い。中遠見山付近で昼食をとる。１３時すぎに今日の幕営予定地・西遠見に着く。雪も本格的に降り出してきたので、予定通り幕営にする。

時々、テントの外へ出ては、まわりを除雪するが、すぐに前と同じように積もってしまう。明日の天気は悪くなりそうだ。

１２月３１日（吹雪）　停滞

予想通り、冬型の天気である。今日はあきらめて停滞と決定。一応、外へ出てみるが、強風で、トレースが消えかかっている。視界もあまり良くない。それから、たしか僕たちのテントから、そうはなれていない所にひとつテントがあったはずだけど、影一つ見当たらない。あとで聞いたら、昨夜からの降雪でテントが埋まっていたらしいとの事。

一日中、降雪が続いたけれども、１５時ごろ一瞬ではあるが、五竜岳を見ることができた。頂上付近はさすがに風が強いらしい。今日の僕は、ほとんど雪かきばかりやっていたようだ。夜にも一回起きて雪かきをやったおかげで、ずっと寝不足が続いている。

１月１日（曇）　Ｂ.Ｐ.（６：５０）──五竜小屋（８：１０～８：５０）──五竜岳（１０：２０～１０：４０）── 五竜小屋（１２：００～１２：２０）──大黒岳と牛首岳の鞍部（１４：１０）

今日は元旦である。天気はくもり、風はそれほどないようだ。朝食をとり、はやばやテントを回収するが、ポールが凍って、外すのにかなり苦労した。すでに２組のパーティーが先行し

ているので、そのトレースをありがたく登らせてもらう。稜線に上がるとさすがに風が強い。

五竜小屋で　ザックをデポして　五竜岳を登ることにする。山本さん、大西さんは、最初、アンザイレンしていたが、途中でやめる。頂上へ着くと　すでに登山者でいっぱいである。風は強くなく、寒くもないので　小休止をし　記念写真を撮る。まつげが真白になり、目もとじるとまぶたがひっつく感じ。この時からカメラの調子が悪くなる。2枚しか　シャッターがおりなかったようである。下りは　頂上直下の所が　後向きでないと　降りられそうもなく　順番待ちである。ザイルを自分でつけられない登山者もいて、いらいらさせられる。30分も待った。しびれをきらした山本さんは、先に行かせてもらうと、順番待ちの行列から　はずしてもらい、適当な所から　下ることにする。アイゼンの前爪を力強くキックしながら　後向きで下る。落ちたら最後なので、慎重にならざるをえない。五竜小屋に着き、昼食もそこそこにすまして　唐松岳への縦走に出発する。

天候が悪化しているのか、黒部側からの風が強く、地吹雪である。白岳から唐松岳へのトレースはなく、山本さんがトップを行く。夏道がでていたので、それを行く。次のピークをまいた所で夏道は雪に隠れてしまう。しかも、指先1mほどしかみえなくなり、天地の境も不明ーいわゆるホワイト・アウトになる。このまゝ進むのは危険なので元の鞍部まで引返し、稜線を忠実に行く。雪庇が、場所によっては　30mぐらい長野県側に張り出し、地図の感じとちがったものになっている。

牛首岳の難所もあることだし、時間も適当なので、大黒岳を越えた所で幕営にする。夜は、かなり寒かった。月がでて、大黒岳の岩峰を　黒々と照していた。

1月2日（快晴）　B.P.（5：10）――牛首岳中腹（6：40～7：10）――唐松山荘（7：30）―― 唐松岳（7：50～8：20）―― 唐松山荘（8：35）――八方尾根スキー場（10：30）

まだ、山は暗いというのに空は雲ひとつなく快晴である。朝食をはやばやとすませて出発する。牛首岳の鎖場を過ぎたところで、ご来光を見るための小休止をとる。はじめて冬山のご来光を見るのは何とも言えぬ感激である。しかし、せっかくのシャッターチャンスだというのに、カメラの調子がおかしくて、この景色が写せないのが残念である。牛首岳を過ぎ、唐松小屋へ荷を置き、唐松岳を往復する。ここからの眺めもまた、最高である。遠くには富士山も見え、そして隣の立山連峰がはっきりと見える。唐松小屋に戻り、小休止をしてから八方屋根をくだる。ただ黙々と歩き通すにはおしい日である。カメラが正常に動いていれば何度もシャッターを押したことだろう。スキー場が見えだしてくると、かなりのスキーヤーが上まで登ってくる。合宿の最後に快晴に恵まれ、運がいいのかも知れない。

最後に、冬山合宿では夏山とは違ったいろんな体験や技術を得ることができ、自分自身の反省も含めて、かなりのプラスになったと思う。

個人山行

妙高山・火打山

大西章代

１９８２年１０月９日～１１日

パーティ：野上(1)、幸内夫妻、国沢、堀田、紀、大西

１０月９日　笹ケ峰バス停（９：２０）――黒沢出会（１０：３０）―― 高谷池（１３：１１）

バスを終点笹ケ峰で降りると、さすがに冷やっとした感じ。

身仕度を整え、まもなく出発。少し道路を歩き、左手の山道へ入っていく、だらだらとした登りが続くが、まわりの紅葉がすごい。まっ赤やまっ黄色、まさに色の洪水。野上さんと堀田さんは、構図、背景などいろいろ考えながらシャッターを切っておられる。秋の山のすばらしさを見せつけられている感じだ。やがて黒沢に出会う。川の流れと紅葉。とても絵になるせいか、カメラマンがいっぱいだった。中でも堀田さんの撮影スタイルはひときわ目立っていたのではないかしら……。

この後、急な登りを越えていくと富士見平に出る。ここから左へ折れ、高谷池まであと少し。ヒュッテに着くと、さすが連休で人が多い。ヒュッテを過ぎると目の前に池が現れた。向こう岸にはテントが張ってある。池に沿って行くとそのテント場に到着。場所を確保し、大小２張りを隣り同士に張った。

１０月１０日　高谷池（６：１５）――火打山（７：３０）――高谷池（８：３５～９：００）――黒沢池（９：４５）――妙高山（１２：４０）――燕温泉（１７：００）

朝、高谷池付近から、北アルプスが南の穂高から北の白馬まで、本当に端から端まで一脈の山の群れとして連らなって見えた。思わずぼうっと見とれてしまった。

池の向こうの方には目ざす火打山がある。丸いきれいな山だ。天狗ノ庭とかいう湿地帯を抜け、ぐっと登ると頂上。向こうに焼山が見える。ここからずっと雨飾山へ続いているのかと思うと、一度行ってみたいなという衝動にかられる。

来た道を戻り、高谷池をあとにする。前に見えている妙高山は、はるか向こうにあるようだ。今日中にあれを越えるなんて、行けるのかな、と思いつつ歩く。途中、何故か笹笛に皆んなが凝り、そこら中の笹の葉を吟味しつつ、道々練習。あんまりやると頭が痛くなりそうだった。

黒沢池を過ぎると２０分ほど急な登りが続き、大倉乗越、そこから左下の方に長助池らしきものを見ながら右にまわりこむようにして、いよいよ妙高山への最後の登りにかかる。

頂上は本当に平なところなので驚いた。何度か遠くから見て、台形の山だと思ってはいたが、あんなに広いとは思わなかった。ここで昼食、天気もよく暖かでとても気持ちがいい。
頂上には大きな岩があり、そこで懸垂下降の練習をしている人などもいて、頂上という感じが全くない。それにどこが一番高いのかよくわからない。結局、三角点は、北峰の平坦な所にあった。かなりのんびりとした後、下りにかかる。何となくすべりそうで、変に足に力が入ってしまい、疲れる下りだ。何とか暗くなるまでには燕温泉に着いたが、テントを張る適当なところを捜すのに時間がかかった。いつも思うことだが、帰るのがもったいなかった。

秋を満喫でき、ゆったりとした楽しい山行だった。

石　鎚　山

堀田　久

１９８２年１１月１２日～１４日　　パーティ：迫田、幸内、堀田、大西

標高１９８２*m*の石鎚山に、１９８２年記念山行をやろうというさそいがある。四国の山に登るのは初めてだし、西日本第１の高峰というのもいいものだ。ルートは、ウイガナル沢をつめるそうだ。

青木より川之江行きのフエリーに乗りこむ。皆でウイスキーを回し飲みをし、雑談などをする。後、適当にごろ寝する。少々うとっとしたらもう川之江、ここから、西条に列車で向う。車窓からは、みかん畑が目につく。西条よりタクシーで登山口に向う。大きな緑豊かな木々が植林されている。山はとても立っている。

登山口には、大きな柿の木があり、長ぼそい実をつけていた。西条柿といい、有名なものらしい。落葉のうえに落ちているのを食べると、いちじくのような味がした。

のんびりと林道を歩き、沢に下る。水量は多く、川石は、青色がかった渦を巻いたようにくねりのはいったものが多い。

わらじをつけ、沢に足をつけると、身を切るように冷たい。皆、ズボンをめくりあげ、白い足をだしている。この沢、大きな石が多く、前方に立ちふさがり、少々ルートの選択に悩まされた。また、出くわす滝はスケールはさほどでない、しかし、ほとんどのものは、ケンスイ滝のため直登できず、高巻ばかりであった。おまけに巻道は大まきのうえ、藪あり、ガレ場ありで、悪い。しかし、この沢のメインポイント、３００*m*のナメを楽しみに黙々と登った。だが、

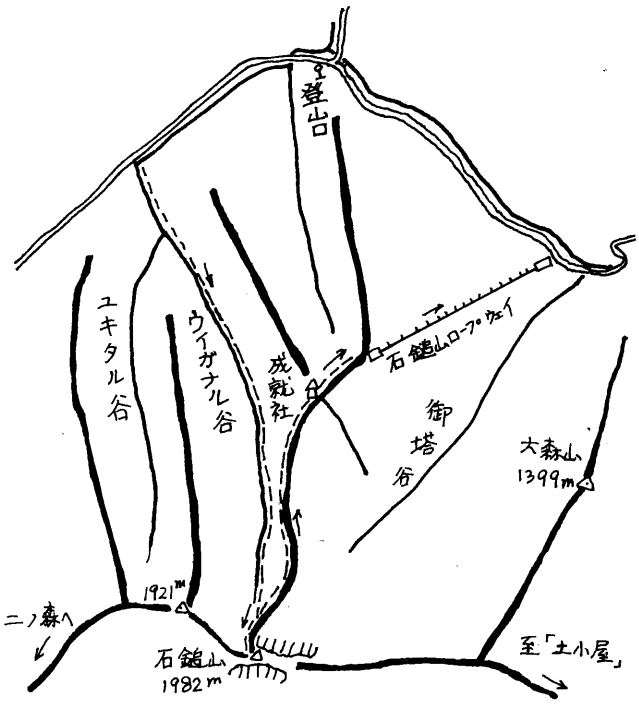
どこかで高巻きしすぎたらしく、沢の上流の河原に来てしまった。これでは骨なしもいいところだ。結局この日は、すずりをかたむけたような小滝を登っただけ。

この河原でテントを張った。星をながめる気になれぬほど寒く、即、コンロをつけ、あたたかくて、うまい豚汁を食べ、くつろぐ。滝つぼに頭まではまった迫田さんは大へんな夜だったと思う。（人の事をいってる場合ではない、僕は、この日スリップし、尾骶骨を折ったのだった。）

次の日の早朝、小さなナメ滝をいくつか登る。谷間に石鎚山頂も見える。水に足をつけるのはいやだけど、早朝の山は、新鮮で気分もいい。後、右側の斜面を藪こぎし、強引に立派な山道へと出る。ここに荷をかためておいて、昼めしだけもち、頂上に向いまっしぐら。途中、一服し、この山を見あげる。西洋の朽ちはてた古城のような山肌に点々と立ってる白い巨木とくっつくように建ってる青や緑色の山小屋がひきたってみえる。うまく表現はできないけど、味のある風景だと感じる。最後に、６０m程の少々氷の付いたクサリ場を登ると、もう山頂であった。ちょうど、北壁の上部になる。たばこをすいながら、あるいは地図を見ながら、皆　思い思いに景色をながめる。周囲の山々は北の山と比べ、より緑が濃くやわらかな感じがするし、晴れていても、どことなく、のんびりとした、空気をとうして南国の山を感じる。

帰りは、山道を多くのハイカーとすれちがいながら下る。途中の神社では、おみくじをひく。結果は、僕だけ小吉で、後の３人は全て大吉。枝にこれをくくっているとポキッ。そして尻もポキッ。後はロープウェイで一気に下山。なぜか、帰りバス停の古い小屋で切符を１枚１枚、腰をかがめ、売ってたおばあさんが印象に残っています。

この山行、けっして岩や雪山のようにハードなものではないけど、単なる３日間、家にいる休日と比べると、くらべものにならないほどしあわせな３日間の休日であった事は絶対に言えます。



笠　ケ　岳

山本泰彦

１９８２年１１月２０日～２１日　パーテイ：山本、野上(1)、内藤(1)、大西、岡田

冬山合宿に参加する新人に雪に慣れてもらうに手頃な山であり、僕がまだ頂上を踏んでいない山ということで　北アルプスの笠ケ岳を選んだ。コースは日数の関係で　笠新道を往復した。

１１月２０日（小雨のち晴）　大阪（前夜）――富山 ― 神岡 ― 新穂高温泉（７：１５）―― 笠新道入口（８：１０）―― 杓子平（１３：２０）―― 稜線（１５：４０）―― Ｂ．Ｐ．（１６：００）

蒲田川左俣谷から、立派な指導標にしたがって　笠新道にはいる。野上さんにトップを行ってもらう。無駄のないベテランという言葉がぴったりする歩き方である。そのせいか、岩小舎沢のジグザグ径は　地図で想像していたよりも　案外楽に歩けた。新人諸君も　早くこの山歩きのコツを体得してほしいものだ。支尾根をからみ、２０００mを過ぎると、径は雪におおわれるようになった。杓子平にはいる頃には、雨も完全にあがり、視界も少しはきくようになる。

抜戸岳から笠ケ岳への稜線が　はるか上に望見できる。杓子平の雪は　表面のみが堅く、とても歩きづらい。夏道通りに　黙々と登る。岩場を過ぎれば、そこは稜線だった。期待していた風もなく、おだやかである。積雪も以外と少い。幕営地からは　夕映えの穂高連峰が　雪と岩のコントラストをみせて　美しい。笠ケ岳は　霧が去来して　ぼんやりしかみえない。

１１月２１日（晴）　Ｂ．Ｐ．（５：００）―― 笠ケ岳（６：３０～７：００）―― Ｂ．Ｐ．（８：００～８：５０）―― 杓子平（９：５０～１０：１５）―― 笠新道入口（１３：２５）―― 新穂高温泉（１４：１０）―― 高山 ―― 神戸

昨晩、いいかっこして防寒具を着なかったので　寒くてたまらなかった。食欲もなく、風邪をひいたようだ。僕ももうオジンですなあ！　ヘッドランプをつけて　出発する。フラフラして、みんなのあとを　遅れながらついていく。一歩一歩、大きな吐息をして「惨め」以外の何物でもない。やっとの思いで　笠ケ岳頂上に着く。頂上には　大きなケルンが　乱立し、二等三角点が埋設されている。頂上からの展望は、はるか遠くに　白銀の立山、劔岳までみえ、すばらしいの一言につきる。無理して　来てよかった。乗鞍岳もさることながら、穂高連峰が圧巻である。槍ケ岳は、穂高の一ピークといった感じで　みばえがしない。

下りは、冬山、沢登り、但馬の山、スキーの話から　登山論まででてきて　歩くより話をしている方が長いという　楽しい下りだった。

笠ケ岳は、トレースもなく、出会ったのは、わずか２パーテイという静かな山であつた。

扇　ノ　山

幸内義孝

１９８３年1月１４日～１７日　パーティ：幸内、内藤(1)、山本、神田、国沢

1月１５日（小雪）　宝塚（前夜２２：２６）――浜坂（３：３７～７：００）――青下（８：３０）―テレビ・アンテナ（１０：００）――上ノ丸（１２：００～１２：４０）――ショウブ池（１３：３０～１３：５０）――小ズッコ小屋（１４：３０～１４：５５）――大ズッコ登り口（１５：４０）

前から一度でいいから、扇ノ山頂上に立ちたかった。もう二度の挑戦に敗退していた。今度は二日あるから、ぜひ頂上へ、行きたかった。

浜坂の駅で仮眠して、青下部落へ。たんぼ道から、杉林の中をジグザグに登る。大きな岩にぶつかり岩の基部を右に巻く。巻く時はなだれそうな所があり、ちょっといやである。巻いてすこしジグザグで行くと尾根に出る。テレビ・アンテナがあり、尾根上を行く。上ノ山が見えて来た。上ノ山の頂上から、登って来た所を見ると、小さな尾根が、四方八方に分かれ、これではガスに巻かれると、なにがなんだかという感じの所だ！　頂上から下方に林道がある。林道におりて林道を行く。道が変っているようだ。林道の下方に、ショウブ池が見えて来た。ショウブ池を回りこんだ所から、ブナ林の尾根を登る。赤の標識がある。少し行くと、小ズッコ小屋につく。

広い尾根をどんどん登る、大きなブナ林とブッシュの間を。僕達は木々に囲まれ、つかまって、どこかへつれて行かれているみたいな感じである。南へ南へと行っているつもりが、木の世界に引き込まれているという感じである。

大石との分岐でテントを張ることにしていたので、大ズッコ登り口にテントを張る。三人でテントを張り、二人で、現在地の確認と、明日の大石の下りの偵察に行く。火口を、見つけて帰って来る。幕営地に帰ったのは　１７時２０分。

1月１６日（晴）　B.P.（６：５０）――扇ノ山頂上（８：０５～８：２０）――B.P.（９：１０～１０：００）――９４３*m*三角点（１３：００）――大石部落（１７：２０～１８：１０）――鳥取（２０：００～２３：４５）――神戸・三ノ宮（１７日、４：１０）

幕営地から頂上へは、尾根道でよくわかる。頂上小屋に着いた時は、ほんとうにうれしかった。下りは快適である。幕営地より　昨日偵察してきた道を行く。方向を定めて行く。思い切って南に振る。そして西へ、仲々尾根にはいれなくて、２時間程かかる。１２時過ぎにやっと尾根に入ることが出来る。それからはシールをはずして、どんどん下って行く。たまに振り返

ると、扇を開いてかぶせたような感じの山である。だから扇ノ山と呼ぶのだろうと思った。杉の植林をどんどん下る。ブッシュになり、又杉林となる。大石川に突き当り、たんぼ道へと出る。もう、うす暗い。部落の灯が見え、ほっとする。楽しい山行であった！　感激！

富　　士　　山

小　林　利　樹

１９８３年1月２２日～２３日　　パーテイ：吉田、江藤（以上は三菱神稜会）、小林

1月２２日　深夜の沼津駅に降り立ち、駅前や近くをブラブラとして少し時間つぶしをしてから仮眠しようと思うが寒くて眠るどころではなかった。

御殿場からタクシーでスキー場までいき、ここで朝食をとる。真白に雪化粧をした冬富士にしばしみとれてしまう。冬富士は岳人が誰れしも　あこがれるのであろう。今、こうして自分が来ていることに胸が高鳴りそうである。

朝食が終わって完全装備に身を包む。風が非常に強くさすがに冬富士である。気温午前７時でマイナス１１度。頂上付近は真近に見えているがさすがに日本一の山であるので結構時間がかかってしまう。突風がくると耐風姿勢で頑張る。

測候所避難小屋横でテントを張る。ザックに入れていたテルモスも寒気の為、割れてしまう。強風が１晩中テントをたたいていた。寒くてなかなか眠れない。

1月２３日　朝遅く出発する。９時半頃、８合目より上部はクラストしていてアイゼンが氷にのつているだけである。けれども少しの不安もなかった。９合目以上は風に対して顔が正対してなかなか歩けない。耳が冷たい。１１時半頃に頂上に着き写真をとり下山にかかる。気温－２６度。下りは尻セードで半分以上すべる。頂上からスキー場まであっというまであった。

ここのスキー場は電話もないのでタクシーも呼べないので歩いて下らなければならない。

電話のある所まで約１４キロメートルぐらいあるというのでぞっとする。５キロメートルぐらい歩いた所でスキー帰りの親切なオジサンが我々３人に声をかけてくれて、車に乗せてくれた。大変ありがとう。御殿場から沼津まで出て、飯を食べる。米の飯がうまい。ビールがうまい。

沼津から大垣行夜行列車で帰るので時間が大分あるので深夜喫茶でコーヒー１杯でねばりました。

三室山～後山縦走

山本泰彦

１９８３年1月２９日～３０日　パーテイ：内藤(1)、幸内、山本

扇ノ山・氷ノ山・三室山の記録は　時々みかけるが　これより南の県界尾根の記録はないようである。そこで　加藤文太郎が「兵庫乗鞍」、「兵庫御嶽」と呼んだ兵庫県第２、第３の高峰、三室山と後山を結ぶ県界稜線に　挑戦してみた。メンバーは　僕の山スキーの先生である幸内君、登りに強い内藤さんと僕の３人。リーダーは、この付近の山域に精通している僕がおおせつかった。戸倉スキー場の積雪が　１００cmあるので　実施に踏みきる。

1月２９日（快晴）　神戸（前夜）――東河内（1：00～7：20）――登山口（8：30）第１の岩（10：40）――三室山（11：50～12：30）――大通峠（14：30～14：50）１１９９m（15：40）――天児屋山（16：35）――江浪峠（17：20）

三室山はこれで５回目。いつもはワカンだが、スキーは今回が初めて。積雪が多く、三室高原キャンプ場管理センターの手前から　スキーをつける。沢沿いの径と別れ、植林地へ来ると、雪が中途半端で　雑木の下が　空洞になっていて悩まされる。左手に大きくまわりこんで　西面の伐採跡にでる。ここは雪もしまっており、ジグザグに登る。第２の大岩から尾根にでるものの、急なのと岩場があるので　左斜面を　ジグザグに登る。植松山からの主稜線にでて、１００mも行くと　三室山の頂上である。氷ノ山が、北方はるかに見える。もちろん、播磨の山々、東山もみえる。この山から　こんなに眺望がきくのは　めずらしい。

昼食後、シールを外して　３人３様のシュプールを描いて　県界尾根を　標高にして２００m下る。下りついた１１４５mコルからは　緩い上り下りが続くので　シールをつける。１１３２mを過ぎると急に左に折れる。積雪量が少いためか、根曲竹を充分押えきっていない個所があり、難渋させられる。ちょっと長い下りがあり、降りついた所は　大通峠であった。ここは林道が県界尾根を横断している。ここで内藤さんに　オハギをご馳走になる。

オハギが、きいたのと、雪が笹を押えてくれた　その両方で　ピッチがあがりだす。1081mの肩をまきぎみに滑り下り、１８０mの急登を頑張れば、細長い頂稜の１１９９mピーク。ここから右手に、直滑降で下れば　あっという間にコルに達する。スキー縦走の良い所だ。この付近の鳥取県側は　伐採直後であるため、歩き易い。コルからの標高差１４０mを登ると天児屋山（１２４４．２m）だ。細長い頂上で　測量棒がたっている。三室山は台形の山容ではるかに遠くなっている。この先は県界尾根に　切開きらしきものがあるが、読図力を試めされ

る所だ。一気に滑りこむと（傾斜がとてもゆるいのです。念のため）、そこは　江浪峠だった。標識１本あるわけではないが、明らかに小径が　横切っている。この峠には　お地蔵様が　あるはずです。雪がこんもりしているので　手で払うと　やっぱりお地蔵様が　でてきました。もう　すっかり暗いので　ヘッドランプを照して　写真を撮ります。うまく撮れますように。

１月３０日（曇のち雨）江浪峠（６：２０）―― 峰越峠（７：１０～７：２０）―― 長義山（７：40）――ダルガ峰（１０：００）―― 最低鞍部（１０：５０）―― 駒ノ尾山避難小屋（１１：２５～１１：５０）――船木山（１２：５０）――後山（１３：２０～１３：３０）――林道（１５：００～１５：１５）―― 峰越峠からの林道と出会う（１６：００）――スキーを外す（１６：２５～１６：３５）――木地山部落（16:45）

昨晩は星もみえていたのに、幸内君の予報通り、雨です。でもほんの小雨です。西へ１００ｍも行くと　鳥取、兵庫、岡山の三国境です。ここから完全な切開きが、県界尾根にあります。スキーですべるにはもってこいなのですが、なにしろヘッドランプの明りを頼りにすべるのですから、こわごわです。案内板があり、岡山県の手で　ハイキング道がつけられているようです。ちょっぴり二重山稜になった所を過ぎると、岡山県側は　皆伐されていて　白銀の美しいスロープになっています。峰越峠の兵庫県側には　休憩所（無人）があります。ここで　雨宿り。

長義山へは、伐採跡を直登します。頂上は北方が開け、北東に天児屋山、北西に沖ノ山がみえます。磁石で見当をつけて　林の中を少しすべりますと、再び伐採跡にでます。急斜面を、適当にシュプールを描いて下つていきます。岡山県側は伐採又は植林。兵庫県側は雑木林とはっきりわかれており、とても歩き易いのです。１０８１ｍの手前は、地図ではわからないのですが　やせ尾根になっています。

１０８１ｍを過ぎると、立派な桧林のなかを行くようになります。でも上からいつ雪の固りが、落ちてくるかわかりません。ひやひやしながら　急いで通過します。ダルガ峰手前の平坦な所は、兵庫県側が、植林直後で歩き易いのです。ダルガ峰頂上は平坦ですが、ここでほゞ直角に折れます。どうもここから　登山道があるのでしょうか？　県界尾根には　切開きがあります。次の１２００ｍピークからの下りは、雪がきれており、枝を握みながら、必死の思いで下ります。本縦走では　ここが　一番悪い所でした。この最低鞍部から、駒の尾山への急登が始まります。

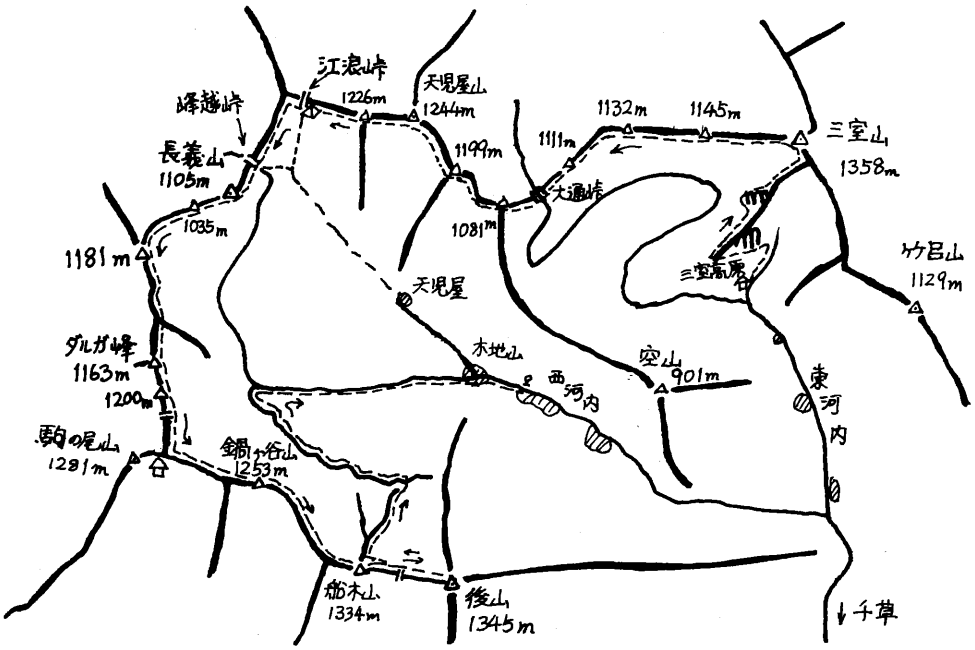
昨年の４月に来た時は、階段になっていましたが　今はすべて雪の下です。１２１１ｍまでくると、傾斜も　ゆるくなります。駒の尾山との分岐にある避難小屋のチムニーも　みえます。この小屋は、ブロック造りで　板敷と炉があり　２０人は収容できる立派なものです。内部もきれいで、ちょっとしたロッジといつた方が　適当でしょう。気持が良いので　つい長居を

してしまいました。サイン帳に　記帳して　さあ　出発です。

鍋ケ谷山、船木山への縦走路の登山道は　雪に隠れてはっきりしません。しかし、おおよそは　わかります。全体になだらかなので　スキーは　実に有効です。もう少し積雪が　あると根曲竹が　完全に埋って　楽だったのですが。天候もどんどん悪化して、視界も５０ｍ。雨か雪になるのは　時間の問題です。船木山（１３３４ｍ）から　２００ｍ下つた所にザックをデポして　後山を往復します。最低鞍部まで、一気に下り、ちょっとした坂を登りきると　「教霊山」の大標識のある後山頂上です。午後１時２０分。三室山を出発して　まる１日たつています。３人とも　こんなに早く着くとは　思ってもいませんでした。「ありがとう。」感激の握手です。後山は　大和の大峰山と同じように　女人禁制の修験道の山です。山名も「行者山」「道仙寺山」、「教霊山」、「後山」と４つもあります。

ザックをデポした所まで戻り、鍋ケ谷林道へむけて下ります。２００ｍ船木山の北面をトラバースして、北尾根を下るのが正しいのです。しかし、１００ｍトラバースして、すぐ下つたため、尾根の腹の急斜面を、必死の思いで　横切り　正しいルートに戻りました。僕のチョンボです。「どうもすみません。」　雨も降りだしました。林道へ滑りこんだ時は、ほつとしました。シールを外しても　傾斜のゆるい林道は　ほとんど滑りません。雨も雪にかわります。峰越峠からの林道に出会ってからは　幾分　滑るようになりました。木地山部落の手前で　工事中のため　スキーを外します。西河内のバス停に、荷物をデポして、車を回収に向います。地元の人のトラックに乗せてもらって　以外に早く、内藤さんの車に戻ることが　できました。

三室山 ～ 後　山　　概念図



信州・根子岳

山本泰彦

１９８３年2月１１日～１２日　パーテイ：山本、吉田

星野君から「根子岳はスキーツアーに良いよ。山本さんでも大丈夫！」とへんな推選をいただいていた信州の根子岳へ　２月の連休を利用して　訪問することにした。計画では　四阿山へ登り、それから根子岳へまわる予定で、上田から菅平高原行のバスに乗り　菅平口で下車。ところが　地図では幅員5.5ｍ以上あるはずの道路が途中でなくなったり、やっとみつけた林道も　途中で消えたりで、読図能力だけは　自信のある我がＫＡＣパーテイもメロメロ。おまけに　積雪が少なく笹と茨に　悩まされ（国鉄のスキー場便りでは１００cmである。）、「もうこれは　別荘泊りだな。」という冗談が本当になり、菅平の別荘地を３ケ所もめぐって　体育研究所を過ぎたあたりを　今宵のネグラとする。

２月１２日（曇のち雪）　B.P.（７：００）――根子岳頂上（１１：００～１１：２０）――奥ダボス・スキー場（１１：４０）

吉田さんの見送りを受け、３０番コースを　根子岳へ向う。（菅平高原バス停に３０番のコース指導標があり、以後頂上に近づくにつれ　数字が若くなる。）落葉松の林の中に　ポツンポツンとシャレたホテルがあり、とても雰囲気の良い所です。道はどこまでも根子岳へ向つて真直ぐに伸びています。菅平牧場の牧柵に沿って行くと　トレールが　あるではありませんか!!しめしめと思って喜んで少しいくと四阿山へ登ったのでしょう、それは牧場の中へ　はいってしまって　残念！　処女雪にシユプールを描いてこそ　山登りの醍醐味はあるのだと気をとりなおして、登って行く。１０番の指導標（これ以後指導標なし）を過ぎて　１００ｍも行くと灌木帯から抜け、一面の雪原になります。もちろん　風もきつくなり　中級山岳とはいえ、やはり冬山です。四阿山が指乎の間にみえます。頂上には　祠と方位盤があります。志賀高原方面は　少しみえるのですが、浅間山方面はまったくみえません。天候が悪化しているのでしょう。

シールをはずして　ダボス２００番コースのはじまりです。（頂上が２００番で、スキー場に近づくにつれ　数字が若くなります。）距離６km、高度差800 ｍ、平均斜度８度。草原で視界をさえぎるもの皆無。雪質もスキー場と変らず、まことに快適。ボーゲンしかできない僕でも　スイスイ下っていきます。避難小屋あたりで　一本たてます。ここからは　直滑降で滑ることが　多くなります。奥ダボスのスキー場に滑り込んで　おしまい。全くのご機嫌。

大同心・雲稜ルート

山本泰彦

１９８３年3月１１日～１２日　　パーティ：山内、山本

冬の岩壁！　それは　山岳会の門をたたいた者であれば　憧れであり　目標であるはずだ。いや、一人前のアルピニストになるために　通過すべき関門というべきだろう。僕たちもKACに入会してから　はや4年が過ぎようとしている。トレーニングを重ねるうちに　冬の壁に対する自信らしきものもついた。そこで、一昨年、三又峰ルンゼを攀った時、印象的だった大同心へ行くことにした。登攀ルートは、山内君の希望もあって　正面壁初登ルートである雲稜ルートを選んだ。

3月１１日（晴）　大阪（前夜）――茅野駅（７：００）――美濃戸口（７：４０）――美濃戸（８：４０）――赤岳鉱泉小屋（１１：４５～１１：１５）――大同心稜Ｂ.Ｐ.（１４：３０）

３週間ぶりに　前日降った新雪の歓迎を受けて　霧の落葉松林のなかを　美濃戸へ向う。八ケ岳は内陸のため　天候が安定しているはずなのに、阿弥陀南稜、三又峰ルンゼへ来た２回とも　雪だった。美濃戸から　鉱泉へは　古いトレールしかなかった。鉱泉のワンピッチ手前で霧も晴れてきて大同心と対面する。全体に黒々としていて、標高差２００ｍもあるとは思えない、ちょっと大きな岩峰といつた感じ。大同心沢の取付から、膝までのラッセルが　始まる。右手に小同心稜がみえる頃になると、雪も氷化しており、アイゼンをつける。樹林帯を抜けた所を　Ｂ.Ｐ.とする。テント設営後、大同心の取付まで　偵察に行く。

3月１２日（晴のち曇）　Ｂ.Ｐ.（６：５０）――雲稜ルート取付（７：３０）――大同心の頭（１３：００～１３：２０）――B.P.（１４：１０～１４：４５）――赤岳鉱泉（１５：１０）――美濃戸（１６：１５）

天気予報は　低気圧の接近を　告げている。寝すごしたせいもあり、遅い出発となる。昨日つけておいたトレールのため、簡単に取付に達する。５０ｍおきにルートがあり、右から２本目に取付く。氷片が　落ちてくるものの、壁に傾斜があるため、我々の頭上を越えていく。

１Ｐ：残置シユリンゲにまどわされ、正式ルートの右側から取付いたため、５ｍトラバース。あとはアブミの掛け替えで攀る。火山岩の泥壁から突き出た石にボルトが打ってあるため、凍っていて動かないとはいえ、気持の良いものではない。全体にかぶり気味。

２Ｐ：左へ人工が始まるはずだが　それらしきハーケンもない。取付をまちがえて　右ルー

トにはいったのだろうか？　右手の凹部にピンが連打されているので　これを登る。１５ｍ上で　ボルトが４本も打ってあるハング下のテラスに着く。最初の出だしで　僕がスリップしたが、膝を打ったくらいで　ことなきをえた。

３Ｐ：右手は行きづまり。左手にまわりこむと　上部にハーケンがあるというので　それを攀ることにする。ビレーしているうちに、このテラスのボルトの意味がわかった。これは懸垂下降用なのだ。２本づつ　何重にもシユリンゲが結ばれ、おまけに上下の輪にまで　シユリンゲが　掛けてある。この上部が登れないので、ここから下りているのだ。そうに違いない！　気がつくのが遅かった。ザイルは２０ｍでたまゝで　さっきから　止まつている。ここは　文献にあったノーマル・ルートの２Ｐ（人工）をエスケープするバイパス・ルートなのだ。文献には　困難なルートと書いてあった。どれくらいたったろうか、ザイルがのびはじめた。残りが少いことを知せる笛を吹くと、ザイルはピタリと止った。１０分たつて、「ヤマモトサァーン」という声が、聞える。いよいよ、僕の番だ。西の空は　青空が拡っている。少くとも昼まで天気はもつだろう。カブリ気味のフェースを直上すると　２段ハングに出会う。アブミでこれを突破するものの、出口も被っていて　左手でジャミングしながら、アブミを回収する。雪の付いたいやらしい草付を　アイスハンマーを頼りにして　ジグザグに直上する。全体がかぶっているので　腕が痛くなるが　必死だ。さきほどのハングから１５ｍは　ノーピンである。山内君は　よく攀ったと思う。僕だったら墜落したかもしれない。

４Ｐ：ここからトップを僕に替わる。３ｍ行くと　しっかりした冬用ハーケンが　打ってある。ノーマル・ルートに戻ったようだ。さらに草付を斜上し、突きあたった所で、右へかぶった岩を乗越す。こういう姿を　写真に撮つてくれたらと思うが、ビレーしているとそうもいくまい。広いテラスでビレー。

５Ｐ：凹角をアブミの替け掛けで抜け、右へ斜上すると　中央バンドにでる。ここは岩も固く、ルート中、最も快適な所だ。

６Ｐ：中央バンドは、岩庇の下を行くようにして　右へトラバース。右ルート終了点を経て、かぶった所を過ぎると　南稜の肩に出る。途中から　岩質が　再び　いやらしくなる。

７Ｐ：ここで　東南面が初めてみえ、小同心から横岳への稜線がよくみえる。縦走路を行く人が　シルエットとなって美しい。最終ピッチなので　トップを山内君と交替する。肩なので風が強く、ビレーしていると　とても寒い。アブミのカチャ・カチャという金属音が　登攀気分を盛りあげている。山内君の赤いヤッケが視界から消えると同時に「登攀終了ですよ。」というはずんだ声が　聞える。僕の番だ！　フリーから人工に移ると　強風のためアブミがまきあげられ、冬山気分がでてくる。最後はマントリングを決めておしまい。

ついに攀った。体の底から満足感が　こみあげてくる。山内君、ありがとう!!　２人共、多

くは語らないが、ニコニコして　喜びの握手をする。赤岳のショルダー・リッジ、阿弥陀岳の北西稜が　美しいラインを　みせている。

主稜線との鞍部から　大同心ルンゼを下る。２ピッチで小同心基部と出会う。ここから、右へトラバースして大同心稜へ戻る。あとはＢ.Ｐ.へ。

僕達が昨日つけたトレースを　下る。今日、登ってきたパーテイはいないようだ。大同心は２日間、僕達だけのものだった。

氷ノ山～扇ノ山縦走

内藤保一

１９８３年3月１９日～２１日　　パーテイ：内藤(1)、山本

氷ノ山から扇ノ山への積雪期縦走は、加藤文太郎の『単独行』を読んだ岳人なら　誰もが一度は　いってみたいと　憧れることでしょう。私も１５年ぐらい前から　２度ほど縦走を　試みましたが　失敗し　久しくなっていました。今回は、良きパートナー　山本泰彦君にめぐり逢い、今年１月の三室山から後山への県界尾根縦走成功を契機として　氷ノ山～扇ノ山縦走計画が　再燃しました。

行く前に　２、３人誘ってみたが　休みがとれないという事で　結局２人で行くことにした。歩行用具として　人数の少ない場合は、輪カンよりスキーの方が有利だろうと考え、スキーに決めた。今後、縦走される人で　スキーを使用される場合、スキー歩行技術を　充分　修得しておかれることを　お勧めします。

３月１９日（快晴）　宝塚（前夜）―― 八鹿 ――草出（3:00～6:00）――氷ノ山山麓スキー場（7:20～7:40）―― ８７２m三角点（８：１５）―― 東尾根避難小屋（10:20～10:40）――ユートピア（12:40～13:00）―― 氷ノ山（14:00～14:15）――氷ノ山越（１５：３０）

草出部落から　山麓スキー場に向う林道は　昨日の降雪のため　トレースがなく、２時間もラッセルして　やっとのことで　東尾根末端の８７２m三角点に達する。尾根にも　もちろんトレースがなく、ものすごい湿雪のため　苦しいアルバイトを　しいられる。遅々として　進まぬ登行に　いらだちすら　感じる。空には雲ひとつなく、抜けるような青空が　なによりも慰めである。氷ノ山から鉢伏山への白銀の山稜が　抜け出たように　迫ってくる。美しい!!山屋の端くれである事に　幸福を感じる。氷ノ山山頂からの展望は　実にすばらしく、北西に目的の扇ノ山が　白いたおやかな姿で　招いている。気の遠くなるほどの距離だ。北東には、

鉢伏山。その右奥に　妙見山から蘇武岳への稜線が　くっきり浮かび、何年か前に　スキー・ツアーに行った事が　思いだされ　しばし　懐しさに酔う。

下りでもスキーが滑らぬ湿雪に　悩まされながら　今日のビバーク地　氷ノ山越に着く。

3月20日（晴）　氷ノ山越（7：00）── 桑ケ峠（8：30）── 陣鉢山分岐（10：30）── 1057m三角点（13：30）── 1150mピーク（15：30）── 青ケ丸（16：30）── シブキ山手前（18：25）

赤倉の頭を右にみて、巻米から桑ケ峠に向う林道まで　一気に下る。林道は　昨日の続きの湿雪で　スキーは遅々として　進まない。陣鉢山分岐付近から見る扇ノ山は、手前に広留野の開拓地を前景に　シブキ峠をへだてて右手に青ケ丸を従がえ、一幅の絵を　みるようだ。

1077mピークを過ぎたあたりで　林道と別れ　右斜面を急登する。登りついた所は　県界尾根から　北西に派生した支尾根である。50mほど右へ進み　県界尾根に合する。この付近は県界尾根が　折れ曲がり　少し複雑である。ここからみる氷ノ山は、長大な西尾根を派生してとても雄大である。この純白の頂上直下に　屏風岩のような赤倉の頭が、黒々と天を突いて　そびえている。ここから雪質は、変化して　ぐっと良くなる。県界尾根は　雪庇、ナイフリッジが続き、登り下りもはげしく、苦しかった。しかし、頑張ったせいもあり　かなりのピッチで　進む。このあたりからみる鉢伏山西面は、氷ノ山からの白一色のやさしい山容と違って黒々としており、所々雪はついているものの　荒々しい印象を受ける。

加藤文太郎がスキーを外して登つたという1150mピークの登りは、さすがに急である。それでもスキーを外さずに頑張る。このピークからみる青ケ丸は、なだらかな3個のピークより成り、白一色の美しい山である。中ノ丸からシブキ山への県界は　平坦すぎてわかりにくい。鳥取県側は、植林直後なので　それを　目印にすればよいだろう。

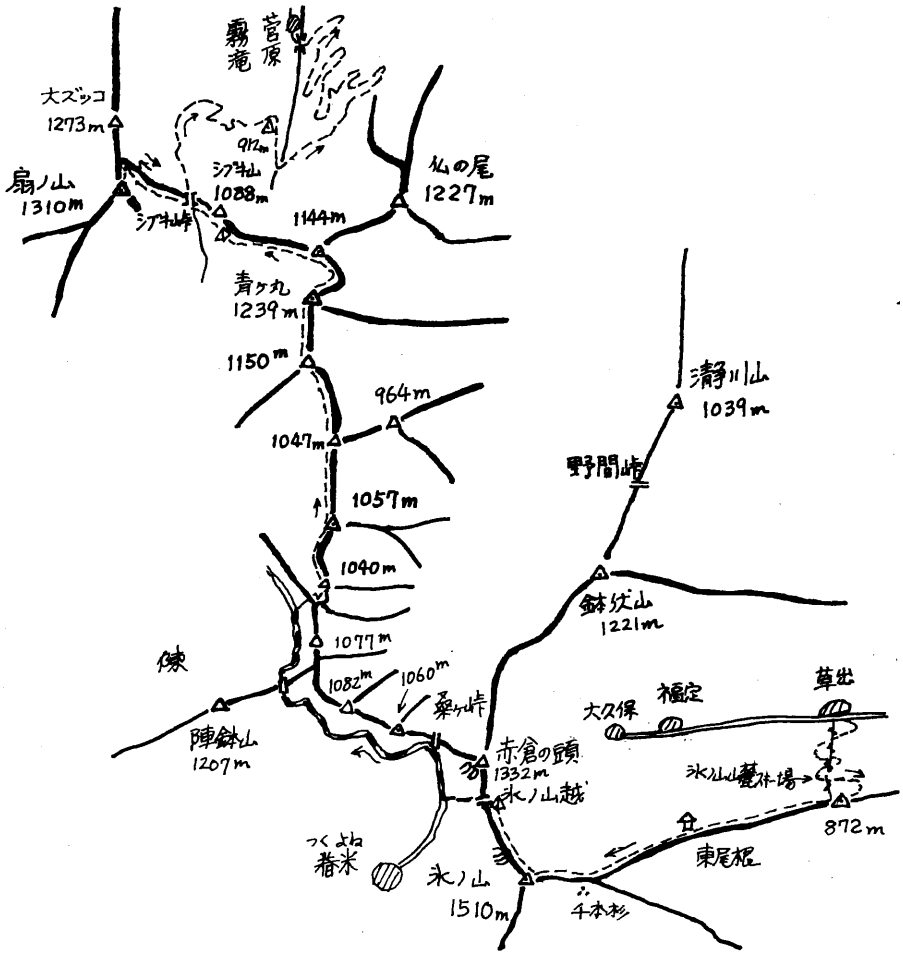
3月21日（雨のち晴）　B.P.(6:00) ── シブキ峠 (6:30) ── 扇ノ山 (8:00～8:15) ── シブキ峠 (8:50) ── 鎌ノ刃下り口 (10:00) ── 菅原部落 (12:40) ── 浜坂 ── 神戸

明ければ雨。シブキ山（1088m）を滑りおりると、シブキ峠である。兵庫県側は皆伐後の雪原、鳥取側はブナ林である。広々としていて　峠のイメージとは　ほど遠い。雨も降っていることなので、ここから　頂上往復することにし、ザックをデポする。県界尾根は　年代を経たブナ林で、傾斜もゆるく　スキーでの登降に　もつてこいである。10m下つて　左へ30m登ると　大ズッコからの稜線と出会う。左へ10分登ると、そこは　避難小屋のある扇ノ山頂上である。時は　午前8時。とうとう念願の縦走を成し遂げたのだ。思わず　感激の握手。15年間、抱き続けていた夢が　現実のものとなったのだ。

下山は　菅原部落への林道を　忠実にたどることにした。鎌の刃コース分岐への手前から雪崩のために　デブりで　林道は埋っており、斜面の角度そのままで谷へ　落ちこんでいる。一度はずしたシールをつけ直して、沢から一気にせりあがっている岩壁の上を　トラバース。スリップでも　しようものなら　一気に１００ｍ以上も　スカイダイビングをして　確実に昇天だ。このような個所が　一時間半ほど続き、緊張の連続だ。谷足に力がはいるせいか　痛んでくる。まったく　あの世とこの世の境目を　スキーで下降しているようなものだ。しかも、雪崩の恐怖に　おびやかされながら。部落について　やっと　今日のすさまじかつた山行にピリオドを打った。

やった！　よく頑張った！　思わず　涙ぐむ。「山本君、ありがとう。」今回の山行は、生涯　忘れることはないでしょう！

氷ノ山 ～ 扇ノ山　　概念図



氷ノ山・大段平

国沢昭美

１９８３年3月２０日～２１日　　パーティー：吉田、迫田、国沢

3月２０日（日）晴

八鹿に前夜の内に着き、駅の待合室で眠る。連休のせいか登山者がけっこう多い。中に入り切れなくて屋外で寝ている人もいるほどであった。２０日の朝は、快晴であった。

朝食をすませて、７時３０分発の鉢伏行きのバスに乗る。福定のバス停の少し上手から八木川へ下り、橋を渡った所で身仕度を整える。千本杉の手前の急斜面を登り切るまでは、スキーはつけない方が良いようである。この道も今度で４回目である。3月も半ばになると、道の所々雪がとけて黒い地面が現れていた。ハチ高原のゲレンデからマイクの音がきこえてくる。ゲレンデの雪もまもなく消えることであろう。トレースされた道を東尾根避難小屋へと登って行く。

１日コースを２日で行くことになっているので、お天気も良いし、気分も良い。スキーを横にリュックに乗せるか、サイドに立てゝかつぐのが良いのか、いずれも木の枝にひっかかって歩きにくい。

小千本の辺りでテントを張り、空身で頂上往復をする。このお天気が明日まで続いてくれゝば良いのだけれども、その望みはなさそうである。頂上からテント場に向って、思い思いのシュプール（？）をえがいて滑って行く。思い思いは重い重いであった。雪が重くて思うように滑れない。明日は　大丈夫かしら？

２人用のテントで３人は少々きつかったけれども、ツアーだからこれも仕方ないでしょう。夜から風が強まり雨になった。

3月２１日（月）雨

朝になってから風がおさまり、雨もそれほどひどくはないようである。昨日、見当をつけておいた神大ヒュッテに向って、まずは出発する。ヒュッテ前に、昨日のものかトレールが続いている。たっぷり雨をすった雪は重く、〃ヘタスキーヤー〃には決して爽快な滑り心地とは言いがたかった。ブッシュの無い大段平コースのハイライト部分なのに！

１１５０m辺りから尾根も狭まり、１０６７.５mの大段平末端まではほとんど平坦なルートであった。末端から次のコルまで、尾根を忠実に滑ったものだからブッシュだらけ。夏道に出るのにスキーをはずして２mほど下る。地図をしっかり見ていれば！　道は北側にまわり込ん

でついているではないか！

コルからは、２つのコブの北側を安井峠までなるい道である。峠には、指導標が雪の中から、頭をのぞかせていた。〃但馬の山々〃では、コブを忠実に辿り２つ目のコブより北東への枝尾根を下るとある。峠からのルートもブッシュが多く、途中から情ないかなスキーをかつぎ、つぼ足で歩く。迫田さん、吉田さんがとても速いので大変しんどい。尾根の大半も過ぎたと思われる頃、ルートをあやまり左手の沢に出てしまった。戻ることも不可能なので、沢通しに下ることにする。小さな谷川と言った感じなので、滝などの心配はないだろう……。

しばらく行くうちに、道と思われる明るい所に出て、右手からも小谷が流れている所に出た。地図に水の印しは無いけれども、谷の出合であった。終りでちょっとルートを外れたが、橋を渡ると安井の部落への林道が続いていた。これで、少しは滑れると思ったのもつかの間、林道も所々雪が消えている。予想はしていたけれども、再びスキーをかついで歩くことになってしまった。私達の下山を見定めていたかのように、いつの間にか雨がやみ、谷間に陽がさしていた。安井から出合の部落への道すじは、もう初夏の装いであった。

ルート・ファインディングの未熟さから、少々ルートを外れはしたけれども、それなりに楽しい山行であった。

千　ケ　峰

国　沢　昭　美

１９８３年3月２７日　　パーテイー：幸内夫妻、吉田、国沢

コースタイム：テント場（７：３０）── 石室（８：３０）── 市原峠（８：５０）── 千ケ峰（９：５０）── コル（１１：５０）── 飯盛山（１３：００）── 高坂峠（１５：３０）── 的場（１８：１５）

予想していた以上に歩程に時間がかっってしまった。前夜に千ケ峰登山口まで行っておいたのは正解であった。〃関西の山々〃のコースタイムでは、それが実質のタイムであったとしても少々きついようである。

国鉄鍛治屋線の中村町駅に、２２時４２分に着いた。鍛治屋駅には、タクシーが無いということで、一つ手前の中村町で下車。公衆電話でタクシーを呼び市原キャンプ場まで行ってもらうことにする。丹治で左へ折れ、人家が過ぎた辺りから舗装道はとだえる。暗いのでよくわからなかったけれども、キャンプ場を過ぎて、車をおろされたようである。少しでも先へ行っておく方が、明日楽である。杉林の中の広い道を行くと二手に別れ、指導標に従って右手へ行く。夜も大分遅いので、適当な場所をみつけてテントを張り、寝ることにする。

２７日７時３０分出発。昨夜、ポツポツふっていた雨も止み、晴れそうである。沢に沿って杉林の道をしばらく行くと、二手に別れている。指導標は無く、地図には一本しか道が無い。３７９ｍの所であろう。右手の沢沿いの道が地図には出ていないようである。念の為、二手に別れて調べてみる。本にある〃右いくの道、左やま道〃の分岐のようである。木にテープを巻いて印をつける。そこからは、谷沿いの山道である。杉の植林の中の静かな道を登って行くと、石室の手前に最後の水場がある。石室で一休みする。朝の空気がひんやりとして気持ちが良い。杉林を抜けると、急に明るくなり、まもなく市原峠に着く。峠から緩やかな登り下りをくりかえし、山頂に到る。身の丈ほどの笹が行く手をさえぎって、とても歩きづらい。その上に露で服が濡れてくる。ふと右手下方の植林を伐採した斜面を見ると、鹿の後姿が見えた。確かに鹿である。何だかとても山深くへ来たような気がした。山頂には、二等三角点と「南無阿弥陀仏」と刻まれた石碑があった。ＯＢの米沢先生が岩座神から登って来られるとのことであったが、会えずであった。一足ちがいで、私達が出発した後に登って来られたそうである。

山頂からも単調な登り下りをくりかえしながら峠に着く。踏み跡ははっきりしているけれども、笹とブッシュが顔にバシバシあたる。ブッシュマンじゃないんだもの、そんなに速く歩けるものですか！

峠から９００.７ｍの飯盛山へは、ブッシュも無く歩きやすかった。所々、草食動物の糞が落ちていたり、足跡があった。９００ｍピークから７３１ｍピーク、５９３ｍピークを経て高坂峠に到る。右側が杉の植林、左側がブッシュで、その境を忠実にたどれば良い。５９３ｍピークで、二手に別れるが左側を行く。テープが巻いてある。

踏査としては、高坂峠より西側の神崎町岩屋へ出ずに、金蔵寺へ行くつもりであった。本の略図にある７８０.２ｍの金蔵山は誤りである。２万５千分の１の地図では、７８０.２ｍは入相山となっている。金蔵山は、峠から南東にある６６２ｍピークの中腹をトラバースして到る金蔵寺のある所を呼ぶようである。登り口は、本の通り、地蔵の横手からである。金蔵寺は、立派なお寺で、境内には杉の巨木が一本あった。ユースホステルは、今はやっていないとのことであった。的場の部落でバスの時間を聞き、かけ足で１８時３３分発のバスに乗り、西脇で乗り替えて神戸へ出た。

思った以上に時間がかっり、余り快適な山歩きではありませんでしたが、このような機会がなければ登ることもなかったでしょう。道中、千ケ峰で見かけた他には、人と出会わない静かな山行でした。

銀杏峰（げんなんぼう）～部子山（へこ）

山本泰彦

１９８３年4月２日～３日

パーテイ：玉岡、山上、大江（以上は新宮山彦グループ）、山本

銀杏峰・部子山は、越前・荒島岳と奥美濃・冠山とのほゞ中間にある山塊である。かって冠山から北に平頂部を有する大きな山を望見して以来、気にかかっていた山である。このたび、和歌山県新宮市の岳友・玉岡氏よりこの両山を縦走する話を聞き、ご一緒させていただいた。

4月２日（雨のち曇）　神戸（前夜）── 福井 ── 宝慶寺（３：３０～１２：００）── １１５０m標高点（１５：００）── 銀杏峰（１６：３０～１７：００）── １３００mコル（１７：２０）

福井駅で落ち合い、登山口の宝慶寺に向う。神戸を出る時、あがりかけていた雨も　ここではかなり強く降っている。宝慶寺いこいの森にある林業研修センターの床下にテントを張り、雨宿り。新宮から５００km近く運転してこられた一行は大休止といった所。「僕は晴男ですから　天気はよくなりますよ。」といいながら　ひと眠りすると　雨もあがり　所々に青空もみえる。昼食をすまして　さあ出発。

銀杏峰から宝慶寺にむかって　派生している志目木谷左岸の長い尾根に取付く。５０mも登れば　尾根らしくなったが　径はなく、雪国特有の幹曲りのブッシュに困渋させられる。でもショウジョウバカマの薄桃色の花が点々と咲き、心をなごませる。５０分ぐらい歩くと　雪がでてきて　ホッとする。１１５０m標高点を望むようになると　ぐっと歩き易くなり　キック・ステップが　快適にきまる。志目木谷を見おろす尾根にとびだすと、銀杏峰の東に派生した尾根の肩から　白銀に輝く荒島岳が　その雄姿をみせている。ここから　頂上までは、ブッシュが完全に埋り、美しい雪稜が　続いている。

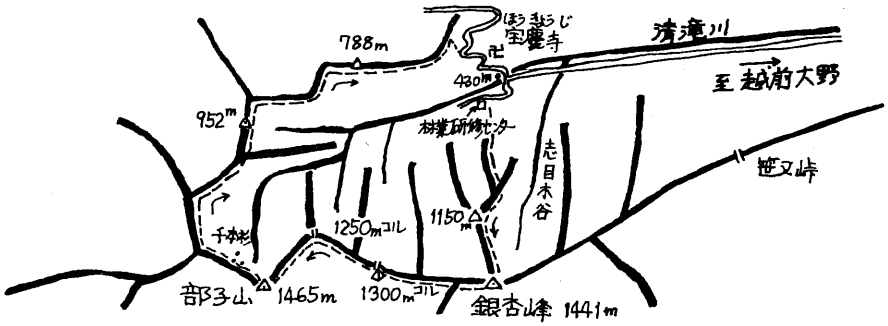
１１５０m標高点に達すると　純白の部子山が　その秀麗な姿を初めてみせる。荒島岳が男性とすれば　部子山は女性である。少し下って　急登を続ける。少しゆるくなると　そこは銀杏峰の頂上の一角である。頂上は、平坦（２００m×５００m）で　東南隅の少し小高い所に　三角点が、埋設されている。ピッケルで三角点を堀り出し、三等であることを　確認する。南方には越美国境の山々 ── 能郷白山、若丸山、冠山、金草岳 ── が　ぼんやりみえている。頂上はあまりにも　だだっ広いので　明日　視界がきかなくなった時のことも考えて、部子山へ向けて　縦走に移り、１３００mコルに　幕営する。幕営直後は　星もまばたき、大野市内の灯もみえていた。神戸山岳会では　ちょっと味わえないような　超豪華メニューの夕食を終え、眠

りにつく。南風が　強く吹いている。夜半には　雨も降り出す。暁方には　雷のオマケまでつく。

4月3日（曇のち晴）　B.P.（6：05）――部子山（7：10～7：40）―― 952m三角点（9：15～9：40）―― 稜線を離れる（11：00）―― 宝慶寺（11：30）

雨はやんだものの、視界は50m。晴れていれば　全く問題ない所だが、磁石と地図のお世話になる。尾根がぐいと左に折れて　部子山の登りになると　気が楽だ。しかし、1350m付近から　ちょっと吹雪になり、雪山らしくなる。2回　平坦な所を過ぎると　石の祠と石碑のある部子山頂上である。二等三角点で　櫓が設置されている。寒かったが　ビールで乾杯。

視界は少し良くなった。北西に次のピークを目指す。千本杉は氷の山のそれと比較すると相当見劣りがする。部子神社跡は　判らぬまゝ水海への分岐を過ぎ、郡界尾根にはいる。この頃から視界も良くなり、西の方が　晴れてくる。快適な雪稜歩きで　どんどん高度を下げていく。尾根は　ゆるくなったり　急になったりで　なかなか　面白い。952m三等三角点の手前で、ブッシュが　でてくる。それはほんの少しの間だけで、雪の道が続く。しかし　それも尾根に残されたわずかなものとなり、木の根元のシュルンドに時々落ち込む。体重の差を　思い知らされる。ほんとに嫌だなあ！　でも、銀杏峰～部子山の稜線が　はっきりみえ、楽しくなる。788m標高点からは、所々ブッシュをこぐようになる。僕もKACに入会して以来、ヤブコギが　ほんとうに下手になりました。時々　玉岡さんに先頭をかわってもらう。峠へでる200mほど手前のコルで　宝慶寺の方から径が　あがってきている。それを下る。途中で崩れて　わからなくなり、谷沿いに下る。滝が2ケ所あり、玉岡さんが　左岸に　右岸にとうまく捲いて下る。車道にでて　少し歩くと　宝慶寺の駐車場である。数百年を経た杉木立のなかを200mも歩くと　田舎にしては　珍しいくらい立派なお寺である。雲水もおり、法灯を伝えている。帰りは白山神社に寄り、橋を渡って雪道を向いの台地に登ると、そこは車をデポした林業研修センターであった。トレールの全くない僕たちだけの山行もこれで　おしまい。頭上には　春の太陽が　さんさんと　輝いていた。



例　会　報　告

１９８２年１０月 ～ １９８３年４月　　括弧内は当番

１０月	３日	蓬来峡　ＩＴＴ	（国　沢）
	１０日～１１日	台高　沢登り（雨のため中止）	（山　本）
	１７日	大月地獄谷	（星　野）
	２４日	不動岩　ＲＣＴ	（吉　田）
	３１日	妙号岩　ＲＣＴ	（広　池）
１１月	７日	油コブシ ～ 山寺尾根　強歩	（幸　内）
	１４日	保塁岩　ＲＣＴ	（小　林）
	２１日	保塁岩　ＲＣＴ	（川　辺）
	２３日	菊水山 ～ 摩耶山　歩荷	（山　本）
	２８日	ロック・ガーデン　歩荷	（山　本）
１２月	５日	六甲山　全山縦走	（小　林）
	１２日	黒岩尾根 ～ 長峰山　歩荷	（山　本）
	１９日	蓬来峡　ＩＴＴ	（広　池）
	２６日	冬山合宿　準備会	
１月	１５日～１６日	扇ノ山スキーツアー（詳細は　８ページ参照）	（幸　内）
	２３日	不動岩　ＲＣＴ	
	３０日	伊吹山	（小　林）
２月	６日	保塁岩　ＲＣＴ	（内　藤）
	２０日	不動岩　ＲＣＴ	（山　本）
	２７日	保塁岩　ＲＣＴ	（堀　田）
３月	６日	六個山 ～ 鉢伏山	（堀　田）
	２０日～２１日	氷ノ山スキーツアー（詳細は　１９ページ参照）	（吉　田）
	２７日	千ケ峰（詳細は　２０ページ参照）	（国　沢）
４月	３日	仁川　ＲＣＴ	（迫　田）
	１０日	黒岩尾根 ～ 石楠花山　強歩	（堀　田）
	２４日	保塁岩　ＲＣＴ	（山　本）

随　想

兵　庫　百　山

山　本　泰　彦

兵庫の山は　薮山が多い。したがって　岩と氷といった派手さはない。しかし、径のない山では、相当な山の実力——ルート・ファインディング、読図力、薮漕ぎの技術等が要求される。私はこういう故郷の山を登っている時、なぜか、ほのぼのとした温かさを感じる。

兵庫の山を語る時、まず脳裡にうかぶのは、加藤文太郎の遺稿集『単独行』であろう。同氏は兵庫・鳥取県境の山々を　兵庫アルプスと呼び、四季にわたって　親しまれたようである。それらの山々をまずあげよう。

I　県境の山々

1.氷ノ山、兵庫槍（1510 m）：兵庫県の最高峰である。播磨からは白鯨の背、鳥取側からは屏風、鉢伏からは巨人の寝姿のように　それぞれ異って見える。薮漕ぎをしていて、遠く木の間越しにこの山を望見すると、私が兵庫県で生れ育ったせいか、ほっとすることがある。

2.三室山、兵庫乗鞍（1358m）：千種川源流の山で、頂上が細長いため　見る方向によっては台形にも三角形にも見える。千種町からの登山路には、2・3ケ所　岩が露出している。

3.後山、兵庫御嶽（1345m）：修験道の山であり、いまだに女人禁制である。行場には大ハング、クラック、チムニーと揃っているので、腕に自信のある方は挑戦されては如何？

4.扇ノ山（1310m）：厳密にいえば、頂上は鳥取県にあるので、文太郎は大ズッコを兵庫立山と呼んでいる。ブナの原生林が美しく、なだらかな山で、スキーツアーにはもってこいである。

5.青ケ丸、兵庫鷲羽（1239m）と仏ノ尾、兵庫白馬（1230 m）：氷ノ山と扇ノ山を結ぶ県境尾根で、最も顕著な山である。秋岡から青ケ丸は谷沿いに、仏の尾は尾根伝いに登れる。

6.天児屋山、三国ケ山（1244m）：三室山の西、大通峠と江浪峠との間にある。双耳峰のなだらかなピーク。山麓では、鉄が採掘され、タタラが行われた。

7.鉢伏山、兵庫大天井（1221m）：頂上までリフトで登れるスキー場であり、昔日の面影はない。しかし　その西北面は小代谷に切れ落ち　冬でも黒々としていて　凄味がある。

8.赤谷の頭、兵庫焼（1216 m）：氷ノ山より南への県境尾根が　戸倉峠で一旦下り再び高くなった所で、戸倉スキー場から尾根通しに登れば　頂上に達する。

その他に県境尾根では、北から 9.牛ケ峰山（713m）、三室山の良き展望台である 10.音水ノ頭（1191m）、後山の前山ともいうべき 11.駒ノ尾、大海山（1281m）、まろやかな三つのピークのある 12.日名倉山（1047 m）がある。

II　播磨の山々　：播磨には西から千種川、揖保川、市川、加古川と 4 本の川があり、それら

の源流の山々を順に挙げていく。

千種川西岸では　先の県境の山の他に、山麓に瑠璃寺のある 13.船越山（727m）。東岸では、どっしりした山容の 14.植松山（1191m）、高原状の 15.鷹巣山（880 m）、赤松氏の城跡である 16.白旗山（440m）、相生市の最高峰 17.三濃山（509m）がある。

揖保川西岸では、兵庫県最南の 1000 m峰である 18.黒尾山（1025 m）、露岩のある 19.水剣山（872 m）、頂上にお寺のある 20.長水山（585 m）、私の故郷、龍野市の最高峰、 21.大蔵山（520m）。東岸では、音水湖をめぐる山々として 22. 藤無山（1139m）、23.三久安山（1123 m）、24.阿含利山（1087 m）、 25.一山（1064m）がある。揖保川の支流、三方川には、 26.神子畑山（977m）、処女のように可憐な姿の 27.笠杉山（1032m）、笹原の美しい頂の 28. 大段山（966 m）大岩のある 29.高峰（845m）、高原状の 30.東山（1016m）、峰山高原の主峰 31. 暁晴山（1077 m）がある。岩の殿堂、 32. 雪彦山（915 m）、三角形ピークの岩山、 33. 明神山（668 m）は夢前川源流の山というべきであろう。

市川西岸では、リトル氷ノ山ともいうべき 34. 段ケ峰（1103m）、これの西にある美しい山 35.千町ケ峰（1139 m）、ずっと南へ下って、鋭いピークと大滝のある 36.七種山（681m）。東岸では、生野鉱山の裏山である 37.高畑山（983 m）、南北に細長い山稜の 38.栗村山（817 m）中腹に立派な神社と杉並木の 39.笠形山（939 m）があげられる。

加古川の支流、杉原川源流には、播磨、但馬、丹波の国境、 40. 三国岳（855m）、 41.マタニ山（928m）、美しい草原の山 42.千ケ峰（1006m）と飯森山（901 m）、 43.鳴尾山（753 m）、 44.竜ケ岳（817m）、マイクロウェーブのある　45.篠ケ峰（827 m）、鍛治屋の名山 46.妙見山（693 m）がある。東岸には頂上に祠のある　47. 西光寺山（713 m）がある。

Ⅲ　淡路島の山々：山頂にお堂があって、海のみえる山が多い淡路島には巡礼路が残っており、信仰の山々という印象が強い。北から月の輪観音の裏山で一等三角点の山　48. 釜口山（476 m）と妙見山（522 m）、山麓には温室が並び、早春の頃にはカーネションの花が盛りである。洲本市の名山であり、千光寺のある 49.先山（448 m）。滝水寺のある 50 柏原山（569 m）。淡路の最高峰で権現社のある　51. 諭鶴羽山（608 m）があげられる。

Ⅳ　摂津の山々：神戸市の背山で私達のゲレンデである　52.六甲山（931m）。中腹に忉利天上寺のある 53.摩耶山（699m）。六甲の裏山として親しまれている　54.帝釈山（586 m）と伝説の山、稚子ケ墓山（596 m）。武庫川上流の三田市内には、美しき鋭峰 55.大船山（653 m）。千刈水源地の山、 56.羽束山（524 m）。一等三角点の山で山頂に祠のある　57.千丈寺山（590m）。中腹に寺のある 58.虚空蔵山（596 m）。猪名川上流の北摂地方には、能勢妙見のある 59.妙見山（662 m）。北にあがって 60.三草山（564 m）と堂床山（584m）。県府境の尖峰 61.高岳（721m）。マイクロウェーブがあり、頂上まで車道のある 62.大野山（754 m）などハイキング

向きの山が多い。

V　丹波の山々：『丹波』といえば篠山、デカンショ節の故郷である篠山盆地をめぐる山からあげていこう。岩峰の多いことで多紀アルプスと呼ばれ、その盟主である 63.三嶽（793 m ）。岩場のある 64.小金ケ岳（718 m ）。白い露岩の 65.八ケ尾山（678 m ）。岩塔の並ぶ 66.雨石山（607 m ）と尖峰の櫃ケ岳（582 m ）。珍しく人名のついた 67.弥十郎ケ岳（715 m ）。花菖蒲とお茶で知られる母子の裏山 68.三国岳（648 m）。盆地の西には、美しい双耳峰をなす 69.白髪岳（722 m ）と松尾山（687 m）。露岩の 70. 西寺山（646 m ）。西多紀アルプスでは岩場のある 71.三尾山（586 m ）と滝谷山（606 m ）、なだらかな円頂の 72. 黒頭峰（621 m ）。氷上盆地には、仁王像で有名な石龕寺の裏にある一等三角点の 73. 石戸山（549 m ）。神池寺の 74. 妙高山（565 m ）。尾根形の頂上をもつ 75. 五台山（655 m ）。十九ものピークから成るという 76. 十九ケ峰、カヤマチ山（ 748 m ）。日本各地に同じ山名のある 77. 鳥帽子山（513 m ）。

VI　但馬の山々：円山川の東、出石盆地を囲む山には 78.床尾山（839 m）、79. 東里ケ岳（664m）と郷路岳（620 m）、京都府境は 80. 江笠山（727 m ）、 81.高竜寺ケ岳（697 m ）、 82.法沢山（644 m ）がある。円山川の西には、城崎温泉の裏の 83.来日岳（567 m ）、豊岡の西の 84.矢次山（568 m ）。さらに西には、スキーツァーで有名な 85.妙見山（1139 m ）、86.蘇武岳（1074 m ）、 87.三川山（888 m ）がある。円山川源流の朝来郡には 88.御祓山（773 m ）、明延鉱山のある 89.須留ケ峰（1053 m ）、独立山塊の 90.建屋山（855 m ）と 91.婆々山（743 m ）。銀山湖の北にあり、法道寺谷の 92. 上生野山（807 m ）と行者山（786 m ）。桜の名所、立雲峡の 93. 朝来山（756 m ）。眼病に霊験あらたかな青倉神社の 94. 青倉山（811 m）。マイクロウェーブの林立する一等三角点の 95.粟鹿山（962 m ）がある。兵庫県の北西、美方郡には、鉢伏山の北に野間峠を隔てて長い山稜を有する 96. 瀞川山（1039 m ）。妙見山と氷ノ山の間にあって小さいながらも独立した美しい山容の 97. 宝引山（804 m ）。柤岡の大池の背山 98. 大峰山（870 m）。加藤文太郎の故郷、浜坂町には 99. 久斗山（671 m）、一等三角点の山 100. 三成山（536 m）がある。

深田久弥著「日本百名山」後記で、『幾重にも連なった山々は皆同じように平夷な丘陵で、特に眼を惹くものがなかった。』との一言で片付けられてしまった中国山地の東端にある兵庫県の山から百座を選んでみた。標高が低く、人里に近いため登るのは容易と考えられがちであるが、はっきりした登山道がないため、以外とむつかしい山が多い。そのためか、一部の山を除いて　全くといっていいほど登山者の姿を見ない。地元の山をもっとよく知ってもらうため、機会があれば　これらの山々の紹介してみたいと思う。

行　　事

1.　故前田浩氏を偲ぶ会

１１月６日午後６時３０分より　高速長田駅の中華料理店「八仙閣」で　登美子未亡人と妹さんをお迎えして 開催された。「八仙閣」は　故人が隊長をされた「Ｐ２９遠征隊」の壮行会が　もたれた場所でもあり、今は亡き前田さんの思い出を　語り合った。

参加者：木村、片山、島田、新川、小川、岡崎、小坂、野上(1)、岸本、野上(2)、川本、米沢、藤本、丸屋、金田、堀野、田中、梅原、武田、谷口、内藤(1)、内藤(2)、星加、宮本、岡田、大嶋、幸内、星野、萩本、国沢、矢木、堀田、山本、川辺、小林、迫田、岡田、広池、三浦、植原、馬場

2.　１９８３年新年会

１月９日午後１時より　登山研修所で　行なわれた。故前田浩氏の追悼集を神戸山岳会会報として　発行することに　決定した。

参加者：片山、島田、新川、小川、小坂、大樫、野上(1)、岸本、藤本、米沢、堀野、田中、土居、谷口、内藤(2)、星加、古賀、宮本、岡田、大嶋、幸内、星野、萩本、神田、国沢、矢木、堀田、川辺、小林、迫田、吉田、大西、広池、紀

編　集　後　記

登山は、ＰＬＡＮ（＝計画書の作成、机上での山行）、ＤＯ（＝実際の山行）、ＳＥＥ（＝山行の反省および記録）で完結する一種のスポーツであるといえよう。そして、最後のＳＥＥの役割を　会報は果していると考える。登った山、山行目的、執筆者によって、それは、記録、紀行文、随筆、あるいは詩と色々な形をとるだろう。そういうものを、今回もできるだけ多くの会員に投稿してもらうよう心掛けたが、なにしろ、活動している者が　登録会員の約１割という当会の現状からみて、執筆者が　結果的に片寄ってしまったのは　残念なことである。

提出いただいた原稿は、すべて掲載することを　会報の編集方針としておりますので、最近行かれた山、思い出の山、山についての随筆等　何でも結構ですから、お送りいただくようお願いいたします。　（山本）

原稿提出先：（〒６５４）　神戸市須磨区緑が丘２丁目１０－５　　山本　泰彦

電話　（０７８）７４１－８６１２

神戸山岳会・会報　No.15

１９８３年４月発行

編集者　山本、国沢

発行者　神　戸　山　岳　会

神戸市灘区高徳町５－３－１　内藤　正司宅

印刷所　甲　南　出　版　社

神戸市中央区北長狭通４丁目　私学会館内